てしまい、やつと動き出したところ今度は下の田に転落、運転者が怪我をする始末、どうもおかしい不思議なこともあるものかと、村の祈祷師におがんでもらつたらさあ大変、「お前達は笠地蔵様を突き落すなど、不届至極じや、お地蔵様の祟りじやぞ」とおどされ、あわてて工事を中止、基座とコンクリートで造り奉安し供養したので工事は以後順調に進んだということである。円満なお地蔵様でなく、玄碩先生が、ペニシリンが出来ても、昔は何百人の耳患者が救われたのじやぞ、医は仁術じや、昔を思べ、昔を忘れるな、と物質文明に警告したのであろう。

おなかしこ、おなかしこである。

（おわり）

資料

佐伯と国木田独歩（古）

〈書簡集より〉

会員　山本　保

佐伯滞在中、友人に送つた独歩の手紙を、日付順に紹介します。これを一読することによつて、佐伯の自然と彼の生活の一端を察知することができます。

（明治二十六年十月六日―芳根町大久保湖州宛）

陳れば去る九月三十日恙（つが）なく佐伯着、再後万事好都合に運び、一昨（十月四日）より授業を始候間御休神願上候。

到着後両三日は言ふ可からざる一種の圧抑を感じ、万事不平のみに不愉快極まり候へ共、只今は不思議にも多少土地にも馴れて為すべく雇はれし仕事だけはあたり前に勤め居候。未だよく知り申さずと雖も先方も余り不満にも有らざるが如く思はれ候。（中略）

佐伯は山水の風景には意外に富み、山あり、河あり、郊外の散歩に至極妙に候。（中略）

此前の教師（独歩の前任者、豊後出身久代孝次郎氏）が英語変則極まる者に候間、教方（英語リーディング）には随分骨の折れる授業に候。（下略）

（注）佐伯赴任の途中、九月二十二日芳根町（滋賀県）に下車した独歩は、東京専門学校時代の友人大久保湖州（水谷余竹五郎）を訪問しました。

佐伯着任一週間後、大久保湖州へ送つた手紙です。佐伯の自然が独歩の心をなぐさめました。

（同　十月十日付―東京田村三治氏宛）

友なきが故に殆んど慰むる処なきに似たれども、幸に愚弟（佐二）同道中ゆえ全くは寂寞くを感ぜず両の夜には共に語り、道を行きては共に希望を談ず。又以て住み慣れざる客情を慰むるに足る。（中略）

学校の事万事好都合にて日々授業致し居候間、之れまた幸に御休神をそふ。先輩並に生徒への受けも至つて宜しき方也。小生の学校の名は鶴谷学館と称し、小生は教師並に館長なり。また殆んど凡ての取りしまり役也。

小生もと教師を好まず、ただやむを得ずして此に及びたるが故に、心事何となく自由にして、ただ一直線に職業に尽すの外、また紛れられる事に付きての例のあるまじき心配少しもなく、ただずんずんやるが故に、反つて先方から畏服尊敬致す傾あり、大いに喜び居候。（下略）

（註）東京専門学校時代の友人田村三治へ送つた手紙です。愛弟収二（十六才）を同伴していたことが独歩の孤独を救い、他方熱

師とにでオ順調なすべり出しを示しました。また生徒間の評判がよいことによって、独歩は自信を強めることができました。

（同　十月二十五日付　―東京中桐確太郎宛）

僕目下の事情は至極安静なり。学校の教授は日々務めり無頓着にかまへ、ただ僕が尽すべき職務と信ずる事を正直に尽すが故に、案外自由にして心安らかなり。

されど三十名ばかりの青年（[illegible]年か）、全く小生の支配感化示教の下に在るを思へば、責任の重きを感じ、ひそかに恐るる所ある也。（中略）

自然は余が今日の境遇ほど、余を取囲みて其の美と其の変化を示したる事はあらず。

山あるなり、煙其の半腹より立ちのぼるなり。夕陽其の頂にのこるなり。月其の上にかかるなり。泉其の谷に流るるなり。茅屋其の麓に村を為すなり。河あるなり。孤帆は漁夫を想はしめ、漁歌は漁婦を思はしむ。町ある なり。山寺を眺下するを得べし。寂莫の谷あるなり。以て沈思の場所たらしむべし。海あるなり。煙波微茫、吾をして一種の悠思と哀感とを惹起せしむ。

（注）中桐確太郎は東京専門学校時代からの友人です。独歩は佐伯の自然（山や川）をたたえています。

（同　十一月二十五日付　―大久保湖州宛）

（前略）小生其後甚だ健全と申すものの不相変、因水田的健康の怪しきやつと御察し被下度候へ。しかし天命は蹶上に在り、懲れて後止むは覚悟の前の事わへ安心して ぱつり〳〵と罷り暮し候間御安心被下候。

滋養分主義の大将は大兄と定まり居る事ゆへ、小生は宗旨を変へて跋渉運動主義の開山とならんとの野心でも なんでもなけれど、兎に角近来は甚だ運動ずきと相成り日曜毎に大概草鞋便到（糸当）で出掛けて、足にまかせ山谷村落野原のきらひなく歩きちらかす事甚だ面白く成り申し候。

十八日は土曜日にて、此日は午後の授業をいたし午後三時前家を出で弟一人伴ひ尺間山（六〇八m）に登り絶頂の茅屋に一夜を求め、月を巌頭千尺の頂に賞し朝日を太平洋の波心に迎へたるなど大愉快にて有之候。

学校（鶴谷学館）の方は面白くもあり面白くもなし不平にてはなし不平を起す理由あらず月給はくれるし仕事は左程にあらず別に不足の申し様なし。只だ時間が二十四時間なるぞ怨みなる。何となれば独倫の時間が少なければなり。

但し観ずれば凡ての事悉く書籍、凡ての者悉く教師、凡ての者悉く詩歌、何ぞ必ずしもペーパーとインクとのみに限る可けんやとは決してまけ惜みに候はず。小生真実佐伯に来りて以来観察上大いに益したる節まことに少なからず候。只だ談心の友なきぞ憾みなる。但しこれもあきらむるに足る事あり小生周囲の自然は何よりの友なり。郵便脚夫の足音は何よりの楽みなり常に傍に在り。又た以て大にもらすに足る然ふば談心の友なしと何ぞ憾みん。

本日「竹取物語」を読み大に感心致し候。小生急に吾国の文学が恋しく相成り申候。竹取物語の如きは之れ一大詩と申す可し、小生読みて終に近くに従ひ幾度か悲を掩ふて泣き申し候。竹取物語を読みて泣かぬ者未だユーマニチーと人世とを語るに足らずと一時は思ひ定め候。但シ之れは余り過激論ならめ、兎も角小生丈けは左しかに泣き申し候。今猶目思ひ起せば何となく天地茫々人生悠々の哀感胸にみつる心地せられて甚だおはれに候。

猶ほ反復熟読致したる上にて十分御意を得べく思ひ居候。
英文学は[1]オーズウオースを読み居候。「逍遥遊」を[2]読みつつあり読みては感じ或じては読み、小生の読書相変はらずのろき事、牛の歩むよりものろし。目下此の詩書の外読まず、否な読むの時間なし。観察せざる可からず。筆をとらざる可からず、而して学校の事なか〳〵に繁し、実際読書の時間とては一日幾何も候はず、但し止むを得ざる儀とは申し乍ら小生前申す通り別に思ふ処ある故へ此事余り悲へず、但しは時によりて残念に思ふ事もあり。

月はなか〳〵田舎にますものあらず、都の月如何に眺めても山の月の小なる水の月の静かなる波の月のきらなる松の月の寒き凡て都になき事なり。城あとの紅葉は又た何となく哀れもあり美もあり感慨の種とぞなる。

朝日夕日は小生の[3]窓より眺めて絶佳言ひ尽し難し。峰の頂に斜に光のこり谷間に紫嵐をたゝゆる様など常に小生の血を潜め且つ躍らしむ。

猶ほ書き続けたく候へ共、紙これにて尽き候間筆を置き度り夜ふけて悲く眠り雲月光を千々にさきて天地亦た何となく物すごき時。（下略）

（註）① 竹取物語　延喜元年（西暦九〇〇年）の作品、作者不明。竹取の翁、かぐや姫、五人の皇子、公達が登場、想像豊かな物語です。
② ワーズワースと普通呼ぶ、イギリスの詩人、ワーズワースの詩集は独歩の愛読書でした。
③ 読書と日記書きと散歩が彼の生活の中心でした。
④ 独歩の下宿の窓、当時山際の坂本郎の二階に弟と共に下宿していた。

（同　十一月二十七日付 ― 田村三治宛）

学校の用意のために時間を要すること少なからず、朝は七時に起き、夜は大概十二時、一時、或は一時半位まで[4]やり居候。（下略）

（註）独歩は教材研究のために夜中の二時頃まで起きていることが度々でした。家人（坂本家）の寝静まった真夜中、独歩の部屋からコツコツと数学を解く石筆（当時は石板に石筆で書いていた）の音が聞こえたそうです。時には朝の四時頃起きて勉強しています。非常な勉強家だったことが理解されます。

（明治二十七年一月十五日付 ― 中桐雅太郎宛）

（前略）或は半夜燈前「熱かざるの記」をつゞり、或は太宰府天満宮を見物して端なく人生の流転を感じ、歴史の長流の煙波縹渺に驚魂し、或は噴火山頂（阿蘇山）に乾坤の変転黙転の恐ろしき事実を今更の如くに直感し、或は寥漠たる高原草野、四顧人なき処兄弟（独歩・收二）並びて且つ歩み且つ語り且つ黙し、日暮れて道遠き哀感に打たれ、或は木賃宿に寒夜、天涯の故人を懐ひ、或は雪の如き大霜を踏み破りて朝気神を爽にして高談闊歩し、聞かざるに聞き、見ざるに観、二十日間の旅行回顧し来れば一巻の詩編も啻ならず、面白し面白し旅行は実に活ける学問なり。（下略）

（註）明治二十六年十二月二十五日 鶴谷学館の冬休みを利用して、御里御井町に帰省した独歩は、再び御里から、博多、太宰府、熊本、途中阿蘇登山を試み、竹田、三重から、今の本匠村を経て、一月十三日夕刻佐伯に帰任しています。合計二十日間の旅行の様子を綴った手紙で、旅行の意義を訴えています。

（同　二月九日付 ― 中桐雅太郎宛）

矢野の産地は矢野の産地なり。語るに足る者皆無と謂ふべし。

（註）矢野は即ち矢野龍渓、独歩は佐伯人に失望を感じはじめています。一部の生徒との間にすきまが生じてきました。その原因を次の手紙にしたためています。

（同　二月二十四日付 ― 田村三治宛）

小生が教会にたえず出席するを面白からず思ふ連中もあり、これが遠因となりて近頃一衝突起り、目下なる民奥歯に物のはさまりたる如くに甚だ面白からず候。

イザとならば大いに気焔を吐き、飄然として此地を去る覚悟に候。されど軽々しくは立たず、好みて人と争ふは徳と智の人の為さぬ処。されど又軍々恐々としても居られず、事々熱誠を以てせば誤る事少からんと存居候。

（下書）

（注）独歩の生徒愛がキリスト教会仲間の一部の生徒（富永徳麿、長間明、飯原治、並河平吉、山口行一等）の上に強くあらわれたこと、恩を受けた佐伯が先輩矢野龍渓を攻撃したことなどが教会反対派の生徒や先輩連の間に反感を買う原因となって、来佐四か月頃から独歩排斥運動が起こり、思いがけない事態に直面することとなりました。

（同　四月二十四日付　―　田村三治宛）

春雨を聴ひて想ひを越方に運べば目ろりと落つる涙、実に涙の涙に候。

吾等青年、切論過去を夢みむより前途にあくがるる時代とは申しながら、時に雨を聴ひて過ぎし昔をふりかへれば、哀恩の悠々たるもの胸間にあふれ来り、或は亡友を想ひて暗涙殊に繁く、或は旧遊を懐ふて幽懐さらに遥、本然の至情雨声に相和して湧き出づ。（下書）

（註）多情多感な独歩の心情が文中にあふれ出ています。二十三才の青年独歩の心情に共感します。

（同　五月十六日付　―　中桐確太郎宛）

此秋は上京致す積りに御座候。鶴谷学館も此夏かぎりに閉校、寧ろ廃校致す事と存じ候。故に小生教師の務めは是非とも此七月限りなり。（中略）

決して最早田舎には出掛け申積りに候。（中略）

今は八、九名の有為の青年（富永徳麿、長間明等）、小生を愛し、小生を信じ、甚だ幸福の有様に候。（下書）

（注）鶴谷学館教師を退職して上京したいという独歩の心境がにじみ出ています。二度と田舎回りはしないこと誓っています。

（同　六月二十七日付　―　大久保湖州宛）

いつの間にか夏の炎天も来り、小生の得意の時に候。日々海水浴を試みつつあり。夏雲恐れず奇峯を吐くなど、自然の美も夏は別して小生には美しく見られてうれし。

産まれて百回もらって千人の生徒を教ゆるよりも独立して三人の子供にいろはを教ゆる方が余程面白し。自然の美必ずしも人心の美と一致せず、田舎の奴が却って交際がむづかしいものに候。

御互の交りの如く自由にして面白く、真実にして愉快なるが如きは田舎に居ては到底望まれぬ事に候。此の如き事を思へば一日も早く東京にゆきたくなる也。（下書）

（註）上京しようとする独歩の志が強く固まってきました。佐伯の自然と独歩の心がとけあわなくなったようすがよくわかります。

結び

右の十一通のうち、大久保湖州へ三通、田村三治へ四通、中桐確太郎へ三通送付しています。

たびたび親友へ送信していたことがわかります。それほど、よき友に恵まれていました。これが彼の大成をもたらした一要因だと思います。

あとがき

独歩年譜

（参考資料）

明治二十一年（十八才）

東京専門学校（後の早稲田大学）英語普通科入学

明治二十三年（二十才）

東京専門学校で大久保余所五郎（湖州）、中桐確太郎、田村三治等と識る。

東京専門学校英語政治科一年に転入。

明治二十四年（二十一才）

牧師植村正久によって洗礼を受く。

東京英語専門学校英語政治科改革を要求してストライキに入る。

大久保湖州と共に専門学校退学。

明治二十五年（二十二才）

ワーズワース詩集を手に入れた。

明治二十六年（二十三才）

「歌かざるの記」起草。

中桐確太郎幹旋の就職先「高島民報社」をことわる。

徳富蘇峯の紹介と矢野龍渓の推薦で、鶴谷学館教頭となる。

明治二十七年（二十四才）

印刷業を企画し、二月六日まず弟收二を柳井町に帰郷せしめ、父母その他と相談させた。

三月十八日独歩も帰省し熱議したが資金調はず、二十八日再び佐伯に帰った。

四月十日徳富蘇峯より、印刷所融資困難との返事が来る。

七月末、鶴谷学館退職。

上京途中、房振町に帰省していた大久保湖州宅訪問。

明治二十八年（二十五才）

大久保湖州雑誌「精神」を編集、史伝、史論家として知らる。独歩も同誌上に屢〻寄稿した。

明治三十三年（三十才）

大久保湖州病歿。

明治四十一年（三十八才）

独歩の病勢悪化。中桐確太郎見舞のため訪問。

六月二十三日茅ヶ崎南湖院に歿す。

東京青山墓地に葬る。

（この項終り）

集会記録

大内・龍護寺を歩いて――鶴岡地区集会の記

日時　二月二十日　午後二時（先ず大内の梅林へ――

出席者　平田覆朗、高木会長、若林、古藤田、清田、吉良、羽柴、五十川氏、高司良恵氏、吉良マツ氏、益田覆周、小野、

大内の梅はやっと五分咲。今年は寒かなか開かぬ。旧梅林はすっかり枯れ及てて今は苔蒸に変っているが、すぐ手前の、堂屋敷のあたりが賑やかに咲いていた。

善教寺の跡に上る。小さな丘であるが、ふみ下の竹林から杉林、梅林一帯が、かつての善教寺の跡と伝えられ、小さな石塔が立っている。正面に「南無阿弥陀仏」西側面に「寛政五丑二月」「善教寺」とある。善教寺の跡は古市にもある、察するに古市からここへ、そして現在の市内馬場区に移ったためであろう。それは寛永十七年（一六四二年）のことで、石塔の寛政五年は宋に百五十一年後に当る。因に記録によると古市の善教寺を移して云々とあるが、ここ大内は昔は古市村に属していたのである。

それから一行は佐賀繁治美の御案内を得て王治権現の丘に上り、古い五輪塔などを見て龍護寺に向い、一段高い丘墓地に昔の龍護寺跡を推定、ここにも古塔が数の中に埋もっていた。

今日の目指すところは内海の堤の横、冬柱の墓地は林の中にあった。新しい古い墓石、その多くは五輪塔である。持参の鍬でつる草をきり払い倒れたるは起し、日星いどころを探ったが、目ざす佐伯惟教の墓石らしいものは探し出せなかった。

失望はしない。必ずどこかに埋もっている筈である。今後の課題である。

それから龍護寺に参詣、惟教父子の位牌、佐伯氏歴代の位牌などを拝し、境内にある佐伯惟真の墓を見る。この墓は其の姿から、戒名、年号から惟教の子惟真のものに違いない。

なかなか日向で同時に戒死した父の惟教の墓が必ずある――というわけである。

ちょっと疲れたので茶屋にお立より暫く先輩仲林方面巡りをした際の、近藤氏の御厚意を高木会長より披露、感謝の誠が捧ずむ。羽柴から大島神社宮司の古文書を提示、写し書共三十通余に及ぶ文書の説解やその内容研究、そしてこの一連の古文書のもつ意義を、みんなに考えていただいた。

地区研修会の一つのやり方で、今年はこのようなのが各地区で企画されることを望む。（羽柴）